

近世石見銀山領における鑪製鉄業の展開と地域社会
(要旨)

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：D116921
氏名：笠井 今日子

本論文は、石見銀山領における鑪製鉄業の歴史的展開を、実証的な考察に基づいて明らかにし、鑪を核として成立していた地域経済の在り方と、それを支えた鑪師の役割について言及することを目的とする。

第一章では、本論の前提として、鑪製鉄業の生産工程と検討対象地域の概要をまとめた。

鑪製鉄業の四つの生産工程の内、「採鉱」・「製炭」工程が鉄山稼ぎの場であること、石見銀山領の鑪製鉄業の大きな特徴の一つとして、銑鉄生産への特化があることを述べた。

第二章では、石見銀山領における御林請負制度の鉄山政策としての側面に注目し、制度の変容とその背景にあった鑪製鉄業の変遷について検討した。

御林請負制度の変遷からは、はじめ御林運上に内包されていた鑪製鉄業関連の諸役が、一八世紀半ばから次第に独立した役として徴収されるようになったことを明らかにした。その背景には、御林から製鉄施設が分離し、御林が燃料供給源として機能する状況に移行した状況があったと考える。

従来は御林ごとに鑪を設け、資源を利用し尽くすと休山として経営を休止する状況があったと考えられるが、一七世紀末から一八世紀初めにかけて次第に経営が大規模化・長期化し、一八世紀半ばにおいては、流通の要衝に構えた製鉄施設に、遠隔地で調達した物資を集中させることにより、製鉄施設を移転させることなく、永続的な鑪操業を実現していた様子が見えてくる。

第三章では、前章に続く一八世紀半ばから一九世紀前期の状況を、鉄流通の側面に注目しながら考察した。

石見銀山領における鉄流通構造は、鉄座政策を画期として、取引先を固定せず柔軟な交渉によって利益をあげていた状況から、鑪師協同による仕法のもとで定律化された流通を行うことが志向される状況に変化した。その背後には、消費者と生産者の間で、指標とする銑相場に乖離があったと考える。石見銀山領の鑪師に特徴的な、協同による銑鉄価格回復運動の目的は、大坂市場の潮流が、次第に消費者の希望に添ってゆくことに対する反抗であり、流通への関与を強めていくことにより相場形成の主導権を握ろうとする動きだったと言える。その動きは、石見銀山領内の銑鉄生産者に経済的な一体感を認識させるようになったのではないかと考えられる。当時、江川流域の鑪師は「川筋鑪師」として経営慣行を共有していたようであり、既得権益を互いに侵さないようにする一方で、不足しがちな製鉄資源を融通し合う相互補完的な鉄山経営の在り方がうかがえる。

第四章では、石見銀山領内の鑪師の内、浜原西田屋による鉄山経営をとりあげ、石見銀山領の鑪師が鉄座政策以来の窮状をいかにして乗り越えていたかについて考察するとともに、既存鑪師の衰微が招いた新興鑪師の台頭という動きに言及した。

浜原西田屋による鉄山経営は、一八世紀末以来慢性的な経営不況に陥っていたと考えられるが、なによりも鉄山操業の保持を優先していた様子が見えてくる。それは、浜原西田屋の鉄山経営によって創出される鉄山稼ぎによって、渡世を送っていた村方の希望でもあり、同家が経営危機に陥った際には、複数ヶ村の連名で家名の存続に尽力していた。この

ように、既存鑪師の存続が望まれる一方で、既得権益の保持に努める鑪師に反発する村方もあり、彼らの期待によって他業種から鑪経営へ参入する事例もあったと考える。

第五章では、鑪稼行地域の百姓渡世を支えたとされる鉄山稼ぎについて、製鉄用炭の生産とその流通の側面から、実証的な検討を試みた。

石見銀山領における製鉄施設の分布は、江川下流域・日本海沿岸・内陸部の三つに大きく分けられるが、この内江川流域の鑪は、江川舟運の活用により、江津から砂鉄を、中流域の山間部から木炭を、製鉄施設に集中させることで操業を実現していた。このような鑪経営の在り方は、江川流域の村々に広範で恒常的な労働力需要を生み出していたと考えられる。また、製鉄物資輸送の返り荷として、山間部には下流域の、下流域には山間部の製品が流通していたことが想像されるのであり、鑪を核とした活発な領内流通が形成されていたと考えられる。